町長ひとりごと ㊾

斉藤 譲

私の家の近所に、慎司君という間もなく四歳になる、可愛い男の子がいる。彼はとても利発で、いつも愛嬌をふりまいているので、隣近所の皆から、「慎ちゃん」「慎ちゃん」と可愛いがられている人気者である。

私は残念ながら、あまり顔を会わせる機会はないのであるが、たまに会った時に見る彼の仕草や、語る言葉は本当に可愛いらしく、一緒にいて飽きることがない。私の父や母は、年中家にいるので、よく遊びに来るらしく、その度に彼のことが、わが家の格好の話題となって、話に花を咲かせるのである。

「今日な、脇の畑にいたらよ、慎ちゃんが来てな、お爺ちゃん僕からのプレゼントだよといって、ネギを一束持ってきてくれたよ。」

と父が語ることもあり、

▼「今日慎ちゃんが来てな、お婆ちゃん僕アイスクリームが食べたくなっちゃったというから、慎ちゃんアイスクリームはないよというと、ここにあるよ、と裏の車庫にある冷蔵庫を指さすんだよ。半信半疑で開けたところ、なるほど本当にあったよ。慎ちゃんのほうが、お婆ちゃんよりよく知っているなといって、大笑いをしてしまったよ。」

と母が可笑そうに語ることもあった。

慎ちゃんのお父さんは、大工さんである。

「慎ちゃん、お父さん今日はどこへ行ったの。」

と聞くと、

「茂原の現場だよ。」

などと、その時々のお父さんの働いている現場を、はっきりと答えるのである。

「余所の子供の育つのは早い」とよく言うが、慎ちゃんを見ていると、今更ながら子供の成長の早さに驚かされる。

▼こんな慎ちゃんの楽しい話を一頻りした後は決って「それに引き換え、わが家の慎ちゃんは、進歩の跡が全く見えないね。」

と側で聞き耳をたてている愛犬タクに、鉾先を向けるのである。するとタクは、まるで人間の言うことが分かるかのように、拗ねたようなへんな顔をする。そこで、一同大笑いということになる。

慎ちゃんとタク

ところで、わが家には、この四歳になる雄のプードル犬タクの他に、以前この欄で書かせていただいた、盲目の愛犬「チーコ」が健在でいる。タクは、慎ちゃんが生まれる少し前に、私が知人からいただいたので、家の者は皆で二人?は同級生だと冗談をいっている。

家族皆が動物好きなのであるが、なにせ今まで飼っていた犬は、どれも雑種で、チーコのように納屋の庇の下で飼ってきたので、座敷の上で飼う犬の育て方は全く無知のため、当初はずい分面喰らったりした。

▼特に、餌は一日一食に抑えるように注意を受けたのであるが、なにせこれまでどの犬にも、たっぷりと餌を与えて可愛いがってきた単細胞の家人には、それはとても可哀相で、耐えられるものではなかった。だから、この注意を無視して、朝晩に加えて、せがまれれば間食まで与えてきてしまった。果せるかな効果はてき面で、プードル犬は小さく育てなければ価値がないのに、今では七キロ近くの堂々たる体躯となり、プードルならぬブードルといったところである。

日中は、テーブルの足に紐で繋いでいるのであるが、庭先を猫が横切った、余所の人が玄関を開けたといってはその度に、テーブルを引っ張り、頭の芯まで響くかん高い声で、それが逃げたり、帰ったりするまで吠え続けるのであるから、たまったものではない。

▼タクの日課は、朝五時半に父に連れられて散歩することからはじまる。

午前中二回、午後三回、夜一回小用を兼ねた散歩をし、その間は座敷でいつも静かに寝たり、そのふりをしたりしていることが多い。一番面倒をみるのは母であるが、タクが一番好きなのは、どうも女房のようである。夕方女房が帰宅すると、母がいくら声をかけても寄りつこうとしない。

「タク!もう面倒みてやんないよ」と母は憎し気に怒鳴るのであるが、どうして敵は一向に気にしない。

それはまるで姑、嫁、孫の関係を見るようで、とても可笑しい。

タクは、ふだんよく道端でくわえてきた石コロを、カリカリと音をたてて咬んでいる。そのせいかどうかは分らないが、タクの歯はオオカミのように鋭い。

「タクを相手にしていると生傷が絶えないよ。」と母が嘆く。いやこれは母ばかりでなく、家内中が被害者であり、世帯主の私とて例外ではない。気にくわない事があれば誰にでも遠慮なく猛然と咬みつくのである。その様は、とても小型犬とは思えないほどの迫力がある。私は、「万事長い物には巻かれろ」という当今の社会風調の中で、媚びをしらないこのタクの気概大いによしと思っている。

ただし、慎ちゃんのような進歩はないが。